

「シンガポール国立大学分析アジア哲学プログラム参加報告書」

京都大学文学研究科1年 佐々木 尽

本派遣プログラムに参加して、NUS(シンガポール国立大学)を訪問したが、特別大きなトラブルもなくプログラムの終了、帰国に至ったことをまず記しておく。以下、①海外での経験、②プログラム内容、③学習成果、④進路への影響、の四点について、簡潔に報告する。

① 海外での経験

昨年度に実施された同プログラムに参加していたこともあり、本派遣は2度目の参加であった。昨年度にシンガポール及び京都(NUSから京都への派遣も実施されていた)で知り合ったNUSの学生とも会うことができ、大変有益な交流を図ることができた。特に、去年と比較して今年度は大学内で過ごす時間が長かった(昨年度は1週間のみ参加したため。本派遣では2週間の滞在であった)ため、昨年度に比べて多く時間をそれらの友人と過ごすことができたことはとても喜ばしいことであった。

② プログラム内容

具体的なプログラムとしては、6日間に及ぶ「心の哲学」の諸講義、ならびに3日間の「アジア哲学カンファレンス」に出席した。カンファレンスは京都大・シンガポール国立大に加えて、台湾の国立政治大の学生・先生が参加したものであったが、講義は京都大のメンバー7人と政治大2人の、人数の少ないものであった。内容は、特にカンファレンスについて、日頃「アジア哲学」すなわちインド哲学や中国哲学などにあまり触れていないこともあって、大変刺激的であった。

昨年度にも感じたことではあったが、単純な語学力の差は大きい。質問等に関しても積極性という意味でこちらのメンバーは明らかに劣っていた。ただ、京都大の学生として授業に出席している姿を見れば明らかのように、日本語の授業に日本語で質問をする、ということに関してはこちらのメンバーが特に質問に消極的であることはない。その意味で哲学の内容については大きく劣ることはない判断できるだろう。単純に語学力を鍛えることで、積極性は付随するよう感じられた。

③ 学習成果

昨年度にも感じたことであるが、英語力の向上である。日本で英語だけで開催される授業は、ここ数年で確かに大きく増えている。だがそれでも、英語を用いて哲学をする、という機会はどうしても少なくなりがちであって、その意味で2週間いわゆる「英語漬け」で哲学を学べたことは大きい。

また昨年度には無かった、現代の心の哲学の講義を受けることもでき、大きな収穫もあった。私事であるが日頃は古典研究(カントの哲学)を行っていることもあり、あまり触れたことの無い分野に、しかも英語で触れられることができたのは大変有意義であった。

④ 進路への影響

来年度は修士2回となり、来年度末に修士論文を提出する予定である。博士課程への進学を希望しているため、海外をも含めて広く進学先をリサーチしていきたい。

今年度は2週間、フルで参加することができ、昨年度の参加にも増して有意義なプログラムであった。日頃の古典研究の進め方や進路等、今後の身の振り方に対して、熟考を促すプログラムとなったことは自分でも悦ばしいと感じる。

最後になるが、昨年度に続いて、このプログラムを主催していただき、手続き等支援を頂いたKUASUの方々及び出口先生に感謝したい。